

## 小学校で英語を学ぼう

著者	山本 淳子
雑誌名	NICかわらばん
巻	225
発行年	2006-04-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/731">http://hdl.handle.net/10631/731</a>

# 看護大通信

19



新潟県立看護大学

講師 山本淳子

今回は、児童英語教育

について考えてみます。日本では、公立小学校の93%で英語教育が実施されていますが(文部科学省二〇〇六年調査)、大体的場合、その内容

はことばの習得というよりもゲームや歌が中心です。

## 小学校で英語を学ぼう

います。使える英語を習得させようとするアジア諸国の意気込みが感じられます。

日本でも英語を必修科目にしようとする動きはあるのですが、国語や英語教育の専門家の二部から反対の声があがっています。

その主張の一部と対応策を考えてみましょう。

**主張一：だれが英語を教え、評価するのか**

指導者不足の対応策として

小学校の教員の免許

制度の変更や中・高の英語

教員の派遣制度の検討、

ALT(英語指導助手)、

地域人材の活用  
の推進などが検討されて  
います。担任  
の先生と専門家の

協力体制で行われるのが  
理想的だと思われま

**主張二：小学校と中  
学校の連携が整備されてい  
ない**

一貫した英語教育のため  
には小・中の英語の指導  
者が十分話し合うべきでし  
ょう。これまで小学校では

あまり行  
われてい  
ない英語  
の読み・

書きも、段階に応じて導  
入すべきかもしれませ

**主張三：発達段階にあ  
る子どもが英語を学ぶこ  
とで、日本語習得に悪影  
響が出る**

この様な主張がある一方、

二つの言語を学ぶことでこ

とばのセンスが磨かれ、相

手の言うことをしっかりと聴  
く態度が身につくという意  
見もあります。私は、児  
童期に母語・外国語を同  
時に習得させることは海  
外の成功例をみても、可  
能であると考えます。

一般的に日本人は英語が  
苦手といわれますが、効  
果的な児童英語教育が、  
英語が得意な日本人の育  
成に結びつくことを期待し  
ましょう。

参考文献 小池生夫(編)  
(二〇〇四)『第二言語習  
得研究の現在』大修館書  
店



児童英語の教材や指導書